

## 「科学」がカルトになるとき

### 【Greachain 注】

「科学がカルトになる」とは不当な言い方のようだが、先の記事にあったように、もし Intelligent Design のような運動を、非科学として断罪すれば、まさに、そのことによって「科学」はカルトに転落する。これは生命の概念の基本にかかわる。生命を生命として捉えず、何か別のものとして説明して、これをドグマ化すれば、それは政治的に利用される。最大の科学ジャーナルの一つと目される『ネイチャー』に、その動きがあると警告している。ここを読むと、One World Government の強い意志が見えてくる。これは世界的なもので、わずかに私の体験した、医療の非倫理化の運動にもそれは見える。単純に「科学」を叫ぶだけの人々は、心して読んでいただきたい。

David Klinghoffer, EvolutionNews

October 14, 2020



タンパク質化学者 Douglas Axe は、こうツイートしている：——「自分は科学の側に立っていると主張する人々は、科学は開かれたアプローチであって、決められたドグマのリストではないということを、理解していない。」

私の考えでは、問題は、ここには2つの現象があり、それらが2つとも「科学」として通っていることである。一方には、アックス博士が言うような、自然について真理を求めようとする「開かれたアプローチ」を意味する科学であり、もう一つの科学は、他の人たちが聖なるドグマとして心の中に持っているらしい「科学」である。彼らは、我々が「科学

を信仰する」、あるいは「科学者を信仰する」ことを要求している。この使い方での科学は、ますますカルトの様相を帯びるようになってきた。誰も、証拠があれば、どんな証拠にでも従うという開かれたプロセスを、盲目的に「信仰」せよとは主張していない。そのようなプロセスが予想するのは、討論であって、信仰ではない。(訳注：反 ID の人々の言うのは、討論すなわち仮説そのものを認めない、ということである。)

## 政治がドグマとなる

彼ら自身の要求が、ますます多くを要求し、ますます大胆になっていくにつれて、カルトとしての科学の威信は、大いに打撃を受けるようになった。その打撃の一つは、「プロセス」の意味での科学の制度が、いかにますます、政治によって腐敗させられていくかに現れている。次には、政治がドグマとなり、我々自身がそれを受け入れ、崇めるように命令されるようになる。

我々の同僚 Wesley Smith は、「科学のイデオロギーがその信用を破壊しつつある」と論ずる、すぐれた論文を書いている：——

科学は決して、イデオロギーによって汚染されてはならない。何といても科学は、政治的信念を述べるものではなく、形ある宇宙について学び、理解する、強力な方法である。

科学の道具は、間違いなく経験的なもの、すなわち観察、計測、実験、反証などである。それが効果をもつためには、科学は客観的に行われなければならない。そのポイントは、何が本当かであって、何が本当であってほしいか、ではない。

これこそ私が、高い尊敬を得ている科学や医学のジャーナルが、あまりにも政治的になっていることに、驚き警告する理由である。たとえば、世界で最も尊敬される科学出版物の一つ『サイエンス』が、最近、大胆なイデオロギー的なコラムを書き、自然に「権利」を与える (granting “rights” to nature) ことを主張した。

「自然の権利」運動とは、環境主義内部の、左翼的・反自由市場的なイデオロギー派閥のもので、その目標は、動植物相やエコシステムに——地質学さえも含めて——存在し、持続し、進化し、その進化の生命サイクルを再生させる、人間のような権利を与える運動である。

自然に「権利」を与える科学的根拠とは何か？ そんなものはどこにもない。「この主張は科学的証拠に基づいたものではない」と、その著者たちも認めている。

では、いったいなぜ、一つの有力な科学ジャーナルが、そのような明らかにイデオロギー的なアジェンダに、その出版許可 (imprimatur) を与えるのか？

それは、急進的な大義、すなわち政治に、ある威信を与えるためである。

ウェズリーは、雑誌『ネイチャー』に、注目すべき編集者記事があると指摘している：—

『ネイチャー』は、発表されたばかりの編集者記事において、すべての客観性の装いをかなぐり捨て、「政治科学とその関連分野の、より主要な研究を発表する」と約束している。

ちょっと待ってほしい！ **政治科学は**、社会学や哲学のように**人文科学**の一つで、アカデミックな主張の一分野である。しかもそれは、偶然の一致ではなく、過去数十年のうちに、大胆な左翼的なものになっているのだ。それはまた主観的なもので、そのテクニック、アプローチ、また結論において、ほとんど定義的なイデオロギーだと言ってよい。

そこがポイントだと言える。「科学と研究は、公共政策の一つのあり方を、体現し形成する—環境保護からデータ倫理に至るまで。」と、編集責任者は書いている。たとえば、彼らは、「研究施設に対して、より力を入れ、自由や多様性や包摂を保護するように委託して、これまで辺境であった地域の声に、より大きなスペースを与えるようにすることができる。」

これらは確かに、称えるべき社会的目標かもしれない。しかし、それらは科学的な問題ではない。

## 絶対的な権利

きょうの The Stream 誌に、John Zmirak が具体的な説明をしている：—「熱心な信仰としての墮胎への執着—どんな理由にせよ、納税者負担による、分娩直前まで許された墮胎は、どんな理性的な根拠もなく、科学でもない」と彼は言う。イデオログたちは、「彼ら自身の価値体系が何か中立的なもので、客観的事実と「科学」に基づいているかのようになっている。しかし、そんな真実はないとしたらどうなのだ？ 実は、それは正反対だと証明されたら、どうなのだ？」—彼は、そのドグマと信条が、「科学」の名において、墮胎の絶対的な正しさを主張する者の間で、最も大声で叫ばれるという、そのアイロニーに注目している。

プロ・ライフ運動の多くの創始者たちが、カトリック教徒であり、それを今日、継続している多くの人たちも、カトリックか、福音派であることは、興味あることだ。しかし、それは「生命は受胎から始まる」ことが、聖書の教えのような、キリスト教の教義だからではない。そうではなく、それが科学の冷静な事実であり、それは「Roe 対 Wade」裁判より前に、世界中の胚発生学 (embryology) の教科書に出ていたものである。宗教的な信仰が、科学の判断を受け入れるように我々を強いている——たとえ我々がそう考えたくなくても。

Zmirak は、墮胎の信条をその源にまで遡っている：——「シモーヌ・ド・ボーヴォワールは、マルキ・ド・サドから借りて、女性は、男性のように、セックスの結果を自由に避けることができるようになって初めて、本当に平等になれると主張した。ここから墮胎が勢いを得た。」

## 生まれなかった生命

生物学者 Jonathan Wells は、最近ここに、胚発生学（「開かれたプロセス」の意味での）という科学と、生まれなかった子宮内の人間はどうなるかについての、その知見を説明している。それは次の2つ問に関わる——

- ・赤ん坊はなぜ生きるべきか？
- ・その発生のどの時点で、人間は痛みを感じるようになるか？

彼は実はここで、科学の**3つ**の別々の意味を区別している。

一つの意味では、科学は、仮説を立て、それを証拠に照らしてテストすることによって、真理を探究する企てである。もしある仮説が、繰り返しテストした結果、証拠に一致することがわかれば、我々はとりあえず、それを真理とみなすことができる。もしそれが何度繰り返しても、証拠と合わないことがわかれば、我々はそれを修正するか、間違いだったとして捨てなければならない。これが**実証的科学**である。

あるいは別の言葉でいえば、それが「開かれたプロセス」としての科学である。ウェルズ博士は続けて言う：——

第2の意味では、科学は、すべてのものに自然的説明を与える企てを、指すことがある。すなわち、すべての現象を、物的な対象と、そこに働く物力の観点から説明することである。しかし、これは唯物論哲学と同じことであり、物的対象と物的力を、唯

一の現実とみなすものである。心、自由意志、靈魂や神は、錯覚と考えられる。これが**唯物論的科学**である。

第3の意味では、科学は、科学的体制を意味することがある。それは、いろんな分野で訓練され研究を行うように雇用された、研究者からなっている。このグループの多数者意見は、「科学的コンセンサス」と呼ばれる。不幸なことに、科学的コンセンサスは、歴史の中で何度も変化してきた。したがってそれは、真理にとって頼りになるガイドではない。そして、この科学的体制の多くの人々が、確かに、すぐれた実証科学を行ってはいるが、科学的コンセンサスは、現在、唯物論哲学に支配されている。

科学カルトは、これら2つの最終的な意味に結合している。すなわち「コンセンサス」が唯物論的ドグマに、すり寄ろうとしている。

このカルトは、政治とイデオロギーを王座にのし上げ、それを科学と呼んでいる。それは、何であれ、科学という名で通っているものの信用を、傷つけるものである。不幸なことに、そこには、本当に科学的な発見を企てる、開かれたプロセスも含まれている。イデオログたち自身が、その罪を負うべきである。しかし、何とひどい話だろう！ それはこのカルトの内部と外部のあらゆる人々に、大きな傷を与えている。

ついでながら、私は「カルト」そのものに反対はしない。あらゆる宗教が、私自身のものにせよ、「新無神論」にせよ、あなたの選ぶ何にせよ、最初はカルトとして退けられていた。ファラオが最初にモーセに会ったとき、間違いなく彼はモーセを、カルトのリーダーと考えた。問題が生じてくるのは、人々が我々に受け入れられようとして、カルトが考えていたようなものではなかったと、二枚舌を使わねばならないときである。

——以上